## ９）現地普及活動事例の紹介

### （１）道北に根ざした春まき小麦初冬まき栽培技術

上川支庁上川農業改良普及センター名寄支所

**１．はじめに**

名寄地区は、積雪期間が長く融雪が遅いため、春まき小麦は早期は種ができず、十分な生育期間を確保できない状況にあった。また、収穫期の 8 月中旬には連続的な降雨に遭遇しやすいことから、穂発芽などで規格外が大量発生していた。

そこで、は種が融雪時期に左右されず、収穫時期も降雨の影響を受けにくい、春まき小麦初冬まき栽培(以下「初冬まき」という)に着目し、地域での技術確立と定着を図った。

初冬まきは、春まき小麦を根雪直前には種し、積雪下で出芽させ、融雪後、地温の上昇とともに生育させる栽培法である。生育期間が確保され、成熟期が慣行栽培より早まるため、春まき小麦を安定して生産することが可能になる。

**２．活動の経過**

初冬まきの導入にあたり、普及センターに蓄積された、生育・気象・生産実績データや指導参考成績をもとに、北農研センター・道立農試の支援を受け、平成 12 年より下川町で試作を開始した。

普及センターでは、初冬まきを実践した生産者の栽培実績を分析し、優良生産者の耕起方法や肥培管理を参考に、現場で使えるマニュアルを作成・配布し、栽培技術の定着・改善を進めた。また、試験ほを設置し、関係機関、生産者と協力して、地域に必要な栽培技術の実証を行った。

現地研修会や講習会は、初冬まきに意欲的な生産者を対象に、解決が必要な課題や情報を提供し、初冬まきの定着に努めた。

**３．普及活動の成果と実績**

(1) 越冬個体率の向上

初冬まきは、覆土が不十分な場合、発芽個体の根張りが劣り越冬率が低下する。そのため、適正な耕起～は種作業体系の確立とは種適期(11 月上旬)の設定、は種法（条播まき播種機の導入）の検討・実証により、平均越冬率は 3 割から 6 割へと大幅に向上した(図 1)。

また、は種機別に越冬率を整理し（図 2）適正は種量を設定したことにより、安定生産と品質向上に寄与し、生産者の意欲向上につながった。

(2) 肥培管理技術の向上

収量品質の確保を図るため、初冬まき栽培実施ほ場の生育状況と子実蛋白含量の結果をもとに、次年度の適正な肥培管理を進め、子実蛋白含量の適正化を図った(図 3)。

また、栽培技術の平準化を図るため、は種や施肥作業の受託組織設立を支援し、作業体系を統一した。赤かぴ病は初冬まきの特性を利用し、春まき栽培の半分の防除回数に抑えることができた。

(3) 広域的な初冬まきの普及

初冬まきが導入されていない地域には、JA、機械メーカーと連携し、は種の実演や現地実証により展示・普及を行った。また、下川町現地ほ場の視察受入など、見せる普及に努めた。栽培講習会では試験場から栽培技術を、先進地の優良生産者から栽培事例を学ぶなど、新しい情報提供に努めた。これらの活動から、初冬まきが近隣市町に波及し栽培面積が拡大した(図 4)。

(4) 地産地消の取り組み

初冬まきにより生産された地場産小麦をパンや麺に加工し、生産者や関係機関で試食し品質の高さを確認した。地元加工業者と生産者の接点を持つことで、生産者の意識が変わり新たな地域振興が進みつつある。

以上、下川町を中心に道北の初冬まき面積が順調に拡大し産地として確立してきた(図 5)。

**４．今後の方向**

今後、取り組むべき課題は以下のとおりである。

(1) 反収８俵以上の多収を目指す

(2) 近隣地域への面積拡大を図る

(3) 初冬まきに適した品種を選定する

(4) 地産地消を支援する

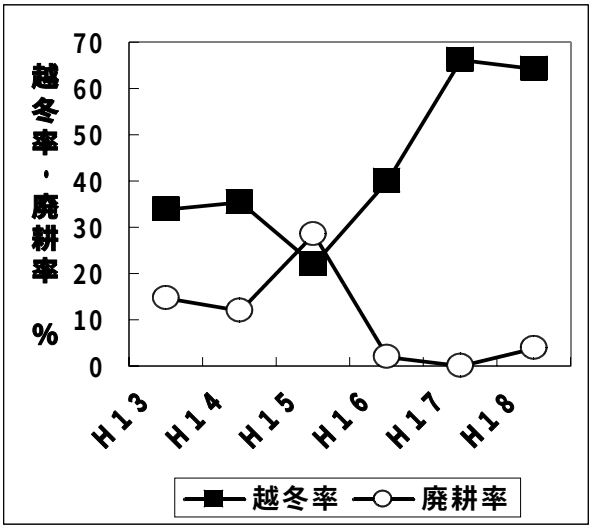


図１　越冬率と廃耕率の推移（名寄地区）

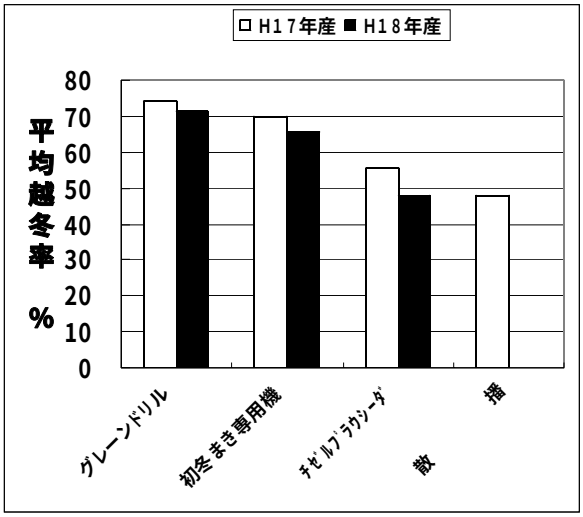


図２　は種機による越冬率の違い（名寄地区）

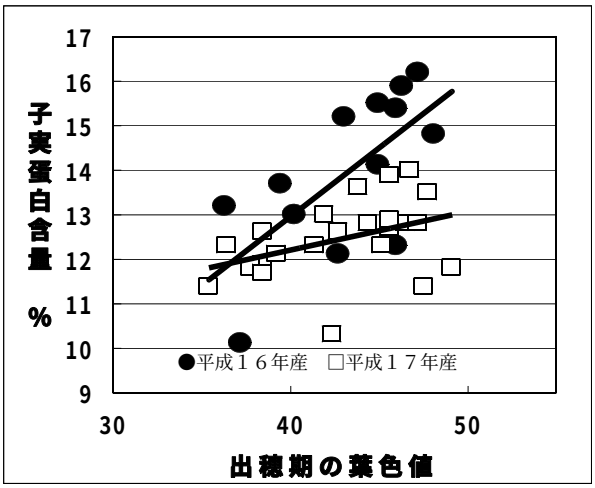


図３　出穂期の葉色と子実蛋白の関係(名寄地区)

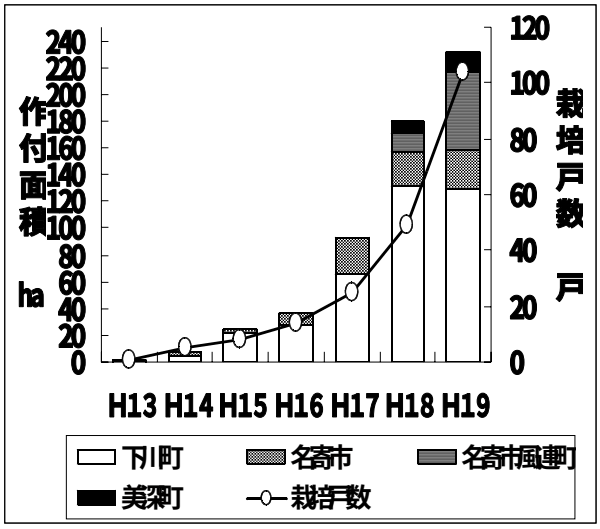


図４　作付面積と栽培戸数の推移(上川北部地域)

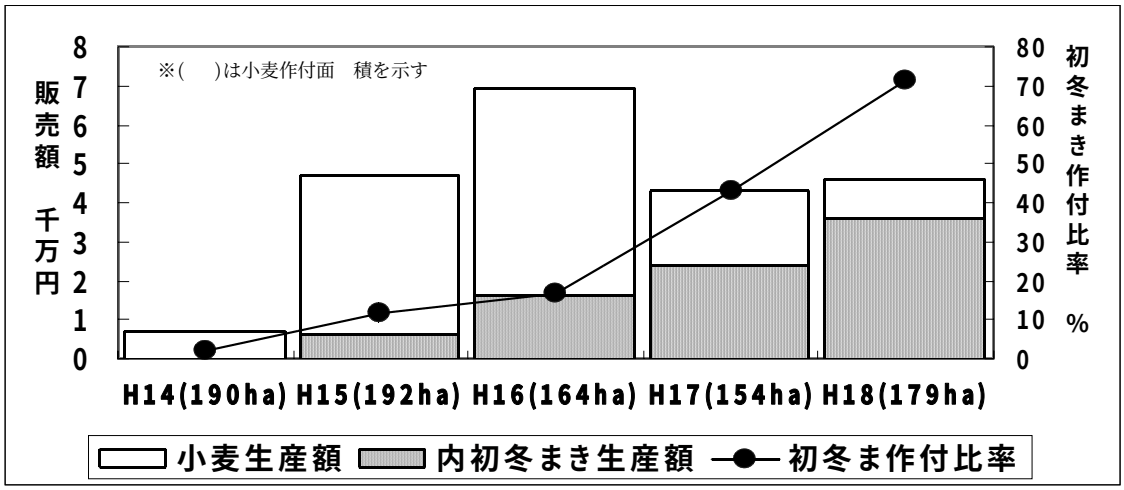


図５　下川町における初冬まき栽培生産の推移（ＪＡ調べ）